The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | カール・ヤスパース : マックス・ウェーバー, そして自らについて |
| Author(s) | バルッツィ, アルノ |
| Citation | メタフュシカ. 1997, 28, p. 15-28 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/66597 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# カール・ヤスパース

## ――マックス・ウェーバー、そして自らについて――

アルノ・バルッツィ
阪本恭子 訳

### 一　マックス・ウェーバーの政治的学問

「マックス・ウェーバー……彼はわれわれの時代の最も偉大なドイツ人であった。」一九六八年、ヤスパースは論文集の中で、一九三二年に発表した論文「マックス・ウェーバー――政治家・研究者・哲学者」に関する序言をこう始める。(1) この論文は、時代と政治に対する不安に基づいて書かれたものである。「それは当時、国家社会主義の猛撃の中にあって、ドイツで可能な真理を喚起するためのものであった。」（前掲書四二五頁）この哲学者は、困窮と混乱の時代、まだなお可能性と使命たるべき重要な歴史的現実を呼び起こそうとした。そのさい一人の偉大な人物の姿が彼に力を貸す。「この偉大なひとは、時代の混迷に心苦しませたにちがいない。」（同）同作品は直ちに、「偉大な哲学者たち」を見据えるヤスパース哲学の全体との連関の中で理解さるべきで、それ（『偉大な哲学者たち』全三巻）が彼の最後の主著となったのは偶然ではない。第一巻が公刊された一九五七年は、第三帝国に匹敵するほど政治的に危機迫る年ではなかった。それにもかかわらず、この著書の刊行は政治と関連している。そこで語っているのは、当時、政治の要請を目の当たりにした哲学者、そして二十年代、とりわけ三十年代の政治的事件と体験を忘れず、むしろドイツが危機に陥った後、ヨーロッパ、いや世界の危機を見抜いていた哲学者である。それはまた、原子爆弾と原子力時代の政治に直面する哲学者でもある。東西間の紛争は、とりわけヨーロッパで激しさを増しつつあった。彼は一九三二年当時、一人の偉大な人物、マックス・ウェーバーを思い浮かべ持ち出したわけだが、後そのようにして、哲学史を彩るあらゆる人物をわれわれに呈示する。

マックス・ウェーバーは、偉大な哲学者を回顧するヤスパースにとって、歴史的、ことに個人的に最も身近な哲学者である。彼はヤスパース同様、科学者、哲学者、政治家であった。政治家、研究者、哲学者のウェーバーについて個々記すに先立ち、ヤスパースは早くも前書きでこうまとめる。ウェーバーの学問的作品が示すところでは、彼は研究者である。しかし結局彼が常に問題とするのは政治的判断である。彼は、政治や時代の政治上決定的な問題に関心を抱き、指針を与えようと努めることによって、政治家であるだけではない。むしろ研究者として作品を書く、その基本的意図において、彼はより以上に政治家であると言えるかもしれない。なるほどヤスパースはこのことを強調はしない。しかしこうしてマックス・ウェーバーが社会学者であり、社会学という新しい学問を、それがわれわれに歴史および時代の根本的特性を体験せしめるはずだと見なすかぎり、彼は政治的である。彼の作品は、政治的学問としてきわめて固有なものである。

## （一）マックス・ウェーバーの専門および基礎学問

ウェーバーの社会学は全ての学問分野を乗り越え、それらを包み込み、さまざまな専門学問を必要とする。ただしそこで立てられるのは、専門学問としての学問の問題、つまり学問は常にただ専門学問たり得るか、あるいは他にありようがあるかという問いである。後者の場合、社会学は基礎学問のようなものとなるだろう。では（その時代ごとの）専門学問と基礎学問の違いはどこにあるのだろう？

一九世紀から二十世紀にかけての基礎学問としての社会学と、サイバネティックスと見られるような今日の基礎学問との関係もまた熟考されねばならないだろう。後者は、あらゆる専門学問が、多かれ少なかれサイバネティックス、あるいはまたサイバネティックス的方法の基本的特質で満たされていることに関連している。社会学はここでは特殊な意味でサイバネティックス的な、つまりシステム論としての社会学である。その場合、社会学はある意味で基礎学問にとどまったであろう。

科学者は説明を試み、哲学者はそれを越えて理解しようとする。これは二十世紀に論じられた説明と理解の違いである。両者はもちろん、さらに自然科学と精神科学を峻別するためにも、学問的に明確に区別され得る。しかしそれは無意味である。というのも、根本的特性として精神科学は、あからさまにかひそかにかという違いこそあれ、自然科学、ことに自然科学的、つまり厳密な方法を好み、自らに転用しようとするか、あるいはまた少なくとも自然科学に本来の正当な学問を認めようとするか、のいずれかであるからだ。それはすでに精神科学としては自らの学問的概念をしばしば見限ってきた。学問は自然科学の立場から決定づけられ、近代の説明科学以来、科学論的に判断

されてきている。科学的思考とは説明的思考である。説明の第一の試みは、因果性あるいは原因-結果関係を用いる思考であった。この方法は解明されず、細分化されるにとどまった。多元的因果性が単一的因果性に並ぶようになったのだ。最近の試みはサイバネティックスである。そこでは一義的な単一的因果性および多元的因果性から可逆的因果性が生じた。円環-因果性も話題にされる。社会学からシステム論への進行は、科学から哲学への移行では決してない。それは説明的思考としての科学の急激な発展なのだ。

マックス・ウェーバーにおいて、説明科学と理解科学が社会学の中で交差していることについて熟考できるだろう。彼は専門の学者であり、細部に注意を払い説明する。そしてそれを乗り越え、説明や根拠づけでは捉えることのできない全体理解を得ようとする。マックス・ウェーバーが自らに、そしてまた、まさに自らの学問的概念の中に、時代が思考と学問に可能たらしめた全てを包括していたのではないかということも、もちろん熟考できるだろう。そこにヤスパースのマックス・ウェーバー評価も傾いていく。彼の一九三二年の考察はそれに示唆を与えるが、その中で彼はマックス・ウェーバーを政治家、研究者、哲学者として描き出そうとする。科学的説明と実存開明(Existenzerhellung)、さらに暗号の形而上学(Chiffrenmetaphysik)を区別するヤスパース自身の哲学的立場を持ち出し得るかもしれない。マックス・ウェーバーは研究者であり説明する。彼は哲学者であり自らを開明し、そして最終的に政治においてきわめて明白に形而上学と結び付く。そこは価値の領域であり、価値の闘争、価値のデモーニッシュなもの(Dämonie)である。

## (二) マックス・ウェーバーの社会学

マックス・ウェーバーは専門学者を自認する。しかし、こと社会学に関して彼は、社会学者としてそのつどあらゆる専門を乗り越える。では社会学の素材とは何だろう?対象だろうか、それとも方法だろうか?ウェーバーが最も説得力を持ち、さらに最も鮮明かつ理解できる作品に仕上げた、あの領域を取り上げてみよう。(2) 即ちそれは資本主義に関する研究である。資本主義は世界至るところに現存し、近代ヨーロッパ以前すでに存在したが、後者は資本主義の精神のもとの資本主義とは区別される。この場合の資本主義とは一定の種類のもので、ある一つの精神に由来、それによって確立した。そうして物質的に生じ、充実した成果を示す資本主義は、精神的で、それによって最終的には形而上学的な力を持った精神的アウラへと止揚されている。ここに資本主義の装飾、粉飾、精神化そして止揚を見て取ることができる。それは観念論を加えたむきだしの唯物論のようなものである。しかしこれはあくまでも副次的要素にすぎな

い。マックス・ウェーバーは、唯物性が実際そのままでは何物でもないことを認識している。資本主義は第一に、精確に限定し把握され得る、明瞭な輪郭を持った対象として現れる。しかしマックス・ウェーバーはわれわれに、資本主義に関する科学的考察において大事なのは、資本主義の認識ではなく資本主義の自己認識であることを気づかせる。

科学者は対象を持つ。それが彼の関心をひき、彼にとって対象そのものとなる。マックス・ウェーバー、この社会学者はそうではない。社会学者はそうではない。彼はわれわれ即ち社会性を動かす全体を見渡す。それが同時に社会である資本主義の対象である。マックス・ウェーバーにとって資本主義とは、社会学の対象の最たるものである。彼は資本主義の中に、あらゆる物質的対象性を越え出る、ヨーロッパの歴史を見て取る。しかし経済において物質的なものとして把握され得るのは、より広大な背景を持つ。それは合理主義である。資本主義と合理主義は、物質と観念のように相対して捉えることができる。にもかかわらず、この範疇では不十分である。マックス・ウェーバーは、科学者がどのように先へ進むかを示す。彼は説明を試み、そうしてその背後に広がる地平へと至る。資本主義は合理主義に基づいている。このことは哲学者によって考察されなければならない。それは科学者から哲学者への移行である。そしてこれはまさに新しい科学、社会学によって成し遂げられるべきなのだ。しかし根拠を問うことは、それ自身、合理化の最終形式である。ここでマックス・ウェーバーは彼が言うところの、あらかじめ与えられた価値の限界に突き当たる。それらの価値は、もはや見通すことのできない、つまり説明し、理解し、根拠づけできないがゆえ、彼にとってデモーニッシュなのである。

マックス・ウェーバー、政治家、研究者、哲学者。ヤスパースがつけたこの順番は、分析的に見ると、こう並べることができる。即ち研究者、哲学者、政治家、そしてその逆という風に。研究者は説明し、哲学者は開明する。ヤスパースの言い方を用いれば、政治家は現存在の暗号を認める。説明し、理解し、象徴化する。

科学者は説明する。それが彼の認識である。科学者とは認識者である。哲学者はそれに余りある。つまり「哲学者というのは単なる認識者以上のものである」[3]のだ。哲学者は、彼が認識するものによって自らを規定する。純粋対象をただ単に自らの隣や前に立てるのではない。対象と結び付き、対象の内へと入り込み、それにつながる。哲学者にとって対象はもはや対峙するものではなく、つまり最終的には対象ではなくなる。あらゆる対象の枠組みは断片的だ。それ自身、断片なのである。断片としての生と作品。ここで断片というのは、マックス・ウェーバーの死が早すぎたこと、病気も理由となって多くの仕事をやり残したという観点ではなく、主要目標である社会学に利用す

るため、断片的にあれやこれやの学問に取り組み、結局、社会学そのものが断片にとどまったという観点において述べている。「彼は、全体性と絶対者に対する意識、他の方法では決して表現できない意識によって、断片的な存在である。」（前掲書四一六頁）したがってヤスパースは人間の有限性と、社会学が規定する「対象」の無限性を指示しながら、説明を試みるのである。

## 二　マックス・ウェーバー――時代の哲学者

ヤスパースは、マックス・ウェーバーに関する最初の論文（一九二〇年の追悼講演）および最後の論文（「マックス・ウェーバーの政治的思考への覚書」一九六二年）[4]の中で、最終的にはマックス・ウェーバーの哲学的生と思考の仕方を明らかにすることに焦点をあてる。これはまさに、最後の論文のタイトル「マックス・ウェーバーの政治的思考への覚書」にも現れている。なぜならそこでは、真理と真実性（Wahrhaftigkeit）が重要な基準となっているからである。ここからも、ヤスパースとウェーバーは、友情によってのみならず、哲学においても結びついていることが容易に伺える。ヤスパースは一九二〇年に行った追悼講演を、マックス・ウェーバーが果たして、そして如何に一人の哲学者であったかという考察で始める。そして後の「マックス・ウェーバーの政治的思考への覚書」（一九六二年）を、マックス・ウェーバーが臨終の床で述べた言葉、即ち「真なるものは真理である」（前掲書四九六頁）で結ぶ。真理と真実性は、原理であり目標である。真理と真実性が、ただ目標としかなり得ないがゆえに、全ての思考は断片にとどまるのである。「世界における彼の生もまた断片的であった。」[5]ここでヤスパースが言っているのは、マックス・ウェーバーが、必要とあらばいつでも、何かを語り、行う覚悟ができているということである。時の思索家。ヤスパースも自らを、少なくとも哲学的かつ政治的な作品『時代の精神的状況』（一九三一年）を著して以来、また初期ドイツ連邦共和国に対する絶えざる批判[6]以降、そう心得ていた。

ヤスパースは、マックス・ウェーバーを政治的にこう見る。つまり、始まりは国家政治的で、終わりはドイツの政治であったと。国家は消失し、後には、そもそもドイツとドイツ人が消滅したとも言えよう。この喪失をマックス・ウェーバーは予感し、けれども早すぎる死によって第三帝国を経験することはなかった。ここでヤスパースは経験から、自らの、そしてわれわれの状況を、マックス・ウェーバーに投影して、彼がさらに政治的批判を続けた結果には、哲学への飛躍のみがなんとか救うことのできる完全な危機へと陥らざるを得なかったと考える。残されたのは哲学である。

つまりヤスパースは、自らの政治的および哲学的自己解釈に基づいてマックス・ウェーバーを捉える。逆も考えられる。つまりヤスパースが自らの哲学者像あるいは自己理解へと至るのは、本質的にマックス・ウェーバーを通してであるということだ。この人物はヤスパースにとって、時代の根本経験であり、時代を共にした重要な人間なのである。最高の政治的標語「真実性の自己規律（Selbstzucht）」[7]。マックス・ウェーバーが言う政治的思考とは、政治そのものの危機をくぐり抜けている最中の思考を意味する。この危機によって、政治は結局のところ無力、不可能となる。政治の終焉。ヤスパースがマックス・ウェーバーの政治的思考の諸段階を通過して行くのは、マックス・ウェーバーが帝国から共和国というドイツ国家過渡期の危機の中で最終的にたどり着いた政治的段階に立ち止まらないためであり、マックス・ウェーバーに即し、彼と共に、第三帝国の比類のない大危機に照準を定めるためである。果たしてマックス・ウェーバーはドイツ国家に絶望しただろうか？ヤスパースは哲学者の答えを示し、それをマックス・ウェーバーにも帰する。

人間が人間として最終的に思考するのは、国家、政治ではなく「真なるものが真理である」ことである。終わりと没落における尊厳と忍耐。偉大さ、つまりそもそも人間であるということは、挫折（Scheitern）の中にいる人間として初めて現れる。ここでヤスパースは、彼の重要な実存的なもの、つまり挫折という、人間一般が偉大さと哲学への可能性に目を開くものによってマックス・ウェーバーを見据える。あるいはむしろ逆である。即ちヤスパースは、このようなマックス・ウェーバーを注視し、経験する中で彼の哲学を手にするのだ。ヤスパースとマックス・ウェーバーのこうした関係は絶えず注目されなければならない。ヤスパースは、それによってマックス・ウェーバーがまさに時代のドイツ人そのものであった中心点をただちに取り出してくる。「マックス・ウェーバーはわれわれの時代における挫折の意義を最も豊かに、そして最も深遠に実現させたものであった。」[8]しかしここには、主にマックス・ウェーバーと共に経験したヤスパース自身の哲学的端緒の、ヤスパースによる解釈が潜んでいる。彼はこのようなひと、そして挫折を問うた政治的思索家として一人の哲学者であり、あるいは時を移さずして哲学者となるのである。

哲学者にとって決定的なのは、彼が自らの場所、立場を自覚しているということである。彼の認識は自己認識に基づいている。認識は、自己のつまり実存の開明へと至る。マックス・ウェーバーは、時代が要求し提供するもの、そして彼が時代のために、時代のためだけに、時代にもたらすことのできるものたろうと試みているという意味で、時代の哲学者である。哲学者は、自らとあらゆるものについて、つまり時代について知り

尽くすことを欲し、またそうあるべきなのだ。つまり「彼は、自らの本質を没落において積極的に実現した一人の人間であった。」（前掲書四二八頁）ここにヤスパースは、マックス・ウェーバーの実存と彼の時代の総和を集約させる。彼は、自らと時代の運命を「明晰さの中で、洞察、言葉、行為によって」遂行した。このようにして「彼は哲学者であった」（同）のである。ヤスパースは要約する。「哲学者として彼は政治家であり、哲学者としては研究者であった。」（前掲書四二九頁）

## 三　ヤスパースと政治

ヤスパースは繰り返して言う。彼の政治的思考はマックス・ウェーバーに影響を受けたことを。ただし、こう限定する。「私は、根本気分の点において彼とは決して完全に一致してはいないだろう。[9]」マックス・ウェーバーの根本気分とは国民性である。ヤスパースにとって「マックス・ウェーバーは……最後の真の国民的ドイツ人」（同）であった。この真の国民性について彼が理解しているのは、「それ自身は現存在の諸条件のもとにある権力を通じて自らを主張する、精神・道徳的現存在の実現への意志」（同）である。国民的自己解釈に関してヤスパースは確かに、多かれ少なかれ全てマックス・ウェーバーから受け継ぐ。彼自身語るように「私はマックス・ウェーバーの根本洞察をそのまま学び、受け取った」（同）のである。ところがしかし、国家社会主義、後れて原子爆弾、そしてさらに連邦共和国との、単に歴史的に新しく、異なるというだけでなく、質において無比の諸経験があった。ここでヤスパースと、とりわけ政治に関する問いを立ててみよう。

［ヤスパースと彼の政治の発展について］

（1）ヤスパースがまず大幅に受け継いだマックス・ウェーバーの立場。彼は後それを出発点として、新しくかつ恐ろしい諸事実に直面させられる政治に対し、自ら固有の関係を見いだす。国家社会主義、ついで原子爆弾。

（2）大学のアカデミズムの世界における政治的思考。（前掲書七〇頁以下）（一九一五―一九二三年、ハイデルベルグ大学の教授たちの会合。ただしマックス・ウェーバーは会合から締め出されていた！）ヤスパースはこの集まりで、一九一八年七月の論争を追憶することによって特異な立場を表明する。彼は失敗に終わった先の戦争攻撃を目の前にして、必要不可欠と思われた平和のために、包括的な放棄を求める。（アルザス・ロレーヌ、ベルギーに対する再補償、東方の旧国境の復元、最終的にはドイツにおける議会制度による民主政治。）これら全ては、国家反逆罪として格付けされていたかもしれないものである。しかしそれは、必要とあらば終極にまで至ることを求める客観性、冷

静、決定能力を示しているだけである。当時の最悪の状況を認識していたのはごく少数の者で、それゆえヴェルサイユ条約も受諾不可能な驚きとなった。ドイツはいまだ勝利の狂喜に酔いしれ、先だっては政治的に、そしてヴェルサイユ条約によって、完全な敗北へと突き落とされた。ここでヤスパースが示す態度は、勇気あるのみならず、行為に対する絶対的命令を待つためではなく自らの立場で政治を決定するため、目下の急務を認識するということで、真に政治的である。

（3）ヤスパースは、全ての講義や著作（間接的には政治的なものと理解できる、第一次大戦後書かれたドイツの大学に関する論文をおそらく除く）の中で政治的事柄に触れることを自ら禁じた後、著書『時代の精神的状況』（一九三一年）で政治的となる。

（4）一九三三年から一九四五年までの、政治に関わる最も決定的かつ深刻な経験。当初より身体的に脅かされ、絶えず精神的重圧に苦しむ。一九四五年四月十四日、ついには疎開移送を言い渡される。四月一日、アメリカ軍がハイデルベルグを占拠。「私は、ドイツ人がナチスドイツの国家の名において自分を殺そうとしたのに対して、自分と妻の命がアメリカ人のおかげで救われたということを、ドイツ人の一人として忘れることができない。」（前掲書七四頁）いとも横暴に扱われたことは、重大な犯罪、おそらく犯罪国家の最も犯罪的なものに属する。ヤスパースの場合明らかなのは、だれかが絶滅さるべき敵対者に名指されたということ。教授の職権や出版の機会の漸次的強奪。「根本経験は自分の国における法的保証の喪失である。」（同）

（5）彼にはこの時代、ドイツ人の自己反省という主要問題が生じる。彼らの同一性は何に基づいているか？このドイツを体験したドイツ人は、肯定的であれ否定的であれ、これから何をすべきか？「彼らは何をすべきだろうか？何をすることによって、彼らはそこに自らの価値を持つのだろうか？彼らはあくまでドイツ人であることに変わりはないのか、しかもそれはどういう意味においてだろうか？彼らに使命はあるのだろうか？」（前掲書七七頁）ヤスパースはこれらの問いは、まだ答えられていないとする。それは、連邦共和国の政治的・道徳的な根本問題である。

（6）ヤスパースは、一九三三年から一九四五年までの個人的な経験ゆえに、世界市民主義（Weltbürgertum）への問いに駆り立てられる。それはドイツ主義か世界市民主義かという問いではなく、世界市民の一人であるドイツ人にとって唯一可能な場所と滞在地の問題である。ここに隠れているのは、カント的思想だけでなく、むしろ具体的な場所がドイツ人にとって困難になったというドイツ史の具体的経験である。それは一九三三年から一九四五年にかけて初めて始まったのではない。ドイツ・プロイセンの歴史である。過去百年のドイツではなく、過

去千年のドイツの回顧である。その政治は、国民、領土を見いださなかったがゆえに困難であった。領土を持った国民国家はドイツ国家ではない。ではドイツ人にとっては、どのような国家が国家なのだろう?これは連邦国家に向けた問いである。さしあたりヤスパースにとって、「ドイツの政治的現存在は、道徳的、精神的にはもはや旧態への再建への傾向、過去一世紀半の記憶に基づくことはできない」(前掲書七九頁)のであり、「何よりもまず人間であること。そしてこの根源から発して、一つの民族に属すること。それが私には重要に思われた」(同)のだ。そして、「世界市民主義とドイツ主義」(同)。

(7) 政治的思考と政治的行動。マックス・ウェーバーもヤスパースも政治的思想家となった。(彼らを取り巻く政治情勢に最終的によっているわけではない。それはマックス・ウェーバーにおいては帝国と第一次世界大戦、ヤスパースにとっては国家社会主義、ついで連邦共和国である。)両者は、彼らの思想家としての作品の頂点および終点において政治的であった。しかし政治は行動ぬきでいられるのだろうか?ここでも両者を比較することができる。マックス・ウェーバーは、具体的な政治に強く関心を持ちながらも、とりわけ第一次大戦後は政治的行動に引き入れられ、求められることはなかった。一方ヤスパースは、生来の病気のため、実際的行動、とりわけ政治的行動を放棄していた。したがって彼にとって辛かったのは、わけても一九四五年以降、政治への直接の要請を実行できなかったことである。彼は文部大臣になり得ていたかもしれないのだ。ここで両者、特にマックス・ウェーバーのように早世しなかったヤスパースに対する問いが残る。つまり彼らの政治的諸問題は、もし彼ら自身が具体的政治に踏み入っていたなら、このように徹底的に発展し得ていたか、ということだ。政治的思考とは本質的に政治に対する批判である。

ヤスパースは、彼の哲学的可能性に応じて、政治的思想家、批評家となる。それは、世界における人間としての包括的な経験に基づいて、政治を批判することである。不安定に揺れ動く、政治と哲学との関係。政治はヤスパースを哲学的反省へと駆り立て、この反省はまた同じく常に政治のために行われる。政治的な動因、基礎、目標なくして哲学はない。「哲学が何であるかは、哲学が如何に政治的に現れるかに示される。」(前掲書八五頁)「政治が私をとらえて初めて私の哲学は、他の領域のみならず形而上学に関しても、その根底に至るまでの完全な自覚に達した。」(同)いまやヤスパースは自ら、哲学の歴史全体が政治との関わりにおいて理解されるべきという認識を得る。政治的帰結なしの偉大な哲学はない。彼はこのようにして、偉大な哲学者の中の政治的なものに目を向ける。彼が偉大な哲学者たちと取り組むのは、このように徹頭徹尾、単に哲学史としてではなく、政治史として考察、評価するためである。したがって政

治は哲学的基準を変え、哲学的認識を修正する。にもかかわらず、国家社会主義以後のドイツ人の状況の中で、哲学の諸説がそう容易には、いやそもそも全く役に立ち得なかった、という問題が残る。それは、行動と認識の弁証法において、そのつど徐々に具体的となる行動である。ヤスパースがすぐに洞察した、ドイツの困難な問題はこうだ。ドイツのための政治的始まりは、どのようにすれば可能か？ヤスパースの提言。つまり、最良のドイツ人によって、ドイツのみを管理する。最終的主権は西側連合諸国にある。「歴史がわれわれに与えなかった教育過程を、少なくとも確実なドイツ側の自主性によって、下から始めること。」（前掲書八二頁）一方では盲目的服従、他方では全体的な行政支配（前掲書八三頁参照）は、具体的行動においてのみ解体され得る。「しかしドイツは、何年か経って初めて、自由選挙によって登場してくる政治的に最も優れたひとびとによって統治され得るだろう。」（同）

## 四　ヤスパースの民主主義批判

「移り行かないもの……それは彼の政治的な考え方である。彼は民主主義の中に、われわれにとって唯一可能な道を把握した。しかし彼は、民主主義の恐ろしい危険を鋭く洞察してもいた。これは、民主主義に関する知識が民衆（Volk）の間に広く伝わっている場合にのみ克服され得る。[10]」マックス・ウェーバーによってわれわれは、民主主義としての政治が一体何であるのかを見抜く眼力を磨きあげたいものである。

連邦共和国の新設には、公のもの（*res publica*）、つまり民衆即ち本当にここで参加を求められる全ての者が必要である。それは、初めは過大な要求として経験されるかもしれない、政治の要請なのだ。ヤスパースが主に攻撃するのは、政党である。憲法第二一条には、政党が民衆の政治的意志の形成に「参加する」とある。ヤスパースにとって、政治的意志の形成が民衆によって行われることは、全く話にならない。それは政党が参加するというだけではなく、政党のみに任せるということになってしまう。このことはヤスパースの義憤の種である。民主主義の政党は、全体的統一政党から十分に身を守ってくれるが、そこには誰が民衆を代表するかという難問が出てくる。民衆を代表すべきは、議会であって政党ではない。ヤスパースは議会を諸政党からなる機関と見なす。

ヤスパースは以下のように批判する。連邦共和国の根源と目標、それは新しい政治の秩序である。この政治の秩序は、単なる「外的機関であって、市民の思考の内的機関ではない。[11]」ヤスパースはナチ時代の、ある一定の年齢層の裁判官たちや、旧諸官庁を見よと指摘する。そこでは、権利と正義の根本問題は絶えず危険にさらされていた。

「根本的な問いは、連邦共和国の構造へと向かう。」（前掲書一二九頁）しかしヤスパースによればこの問いは、憲法を指示するだけでは答えられない。政治的実践はこの共和国の人々によって決定される。連邦共和国の構造はしたがって公のものなのだ。ヤスパースにとって国家の構造は二つの面を持つ。一つは機関と法であり、もう一つは、「それらとともに、そしてそれらを通じて、さらにそれらが由来する人々の動機に基づいて生じるもの」（同）である。

議会の民主政治の問題。憲法第二〇条「全ての国家権力は民衆から始まる。」しかしヤスパースは、「憲法の起草者は民衆に恐怖を抱いていたらしい」（前掲書一二九頁以下）とする。彼がここで言っているのは、民衆の有効性の制約である。四年ごとの選挙の成り行きをひとえに見守り、何よりも、選挙されるべき人々がどのようにあらかじめふるいにかけられるかを追及する。諸政党は候補者名簿を作成する。政党はそこから前もって選択する。それは「実際の選挙である隠れた予備選挙」（前掲書一三〇頁）の問題であり、最終的には、普通の党員が一度も候補者指名に本当に参加せず、「政党の階級組織と官僚機構を決定的に選択する」（同）という結果になる。

彼は諸政党を別々にとりあげ、孤立した諸権力への独立化を告発する。そこで必要とされるのは、政党が、民衆の機構ではなく、より一層、国家の機構になっていくことである。（前掲書一三三頁参照）「政党は……民衆の生活から離れて、それ自身国家となる。そして本来政党は、民衆の無制約な自由からさまざまな面で自律的に形成されたものであったが、政党人の意識の中では、権力の担い手そのものとなる。国家、それは政党の集まりである。国家運営は政党による寡頭政治に任されている。この政治は国家を横奪する。」（同）

これはヤスパースによると、諸機関が次のようなものを意図していることに起因する。連邦共和国の基礎づけに際してもっとも自然な着想は、政権の安定であった。「危険な民衆の積極的な参加は少なければ少ないほど良い。民主主義を欲すると主張したので、彼らを排除はできない。しかし彼らの影響力は、四年ごとに行われる選挙に減らされた。」（同）

## 五　ヤスパースの政治における哲学的行動

ヤスパースはますます政治的哲学者となっていった。しかし彼は特別な状況にいる。それは世界政治に関わる原子力時代における状況であり、いまだ滞っているドイツ国家の基礎づけにおける状況である。つまりヤスパースが置かれている状況は、異例なものなのだ。彼が哲学者として、他の重大問題を含めて政治に関わる問題をも論じるのは、単純にそうなのではない。政治的問題はこの哲学者の中心問題そのものとなったのであ

る。

［ヤスパースの哲学的行動］[12]

(a) 歴史の根本的問い（『歴史の起源と目標』一九四九年、参照）

(b) 政治の倫理的諸前提とその現実的諸条件に関する考察

(c) 「私の依拠する世界市民という立場に基づく政治的思考を方向づけること」（前掲書八四頁）

最終的に重大なもの、「それは人間、つまり未来の鍵を握っている数十億の人間ひとりひとりの決断と行動の責任である。」（同）ここにも最終的にヤスパースの、次のような基礎づけを図る政治的原理体系がつながる。それは、平和とは自由に基づいてのみ可能であり、同様に自由は真理、つまり真実性に基づいてのみ可能である（フランクフルトでの平和講演参照）[13]、という基礎づけである。即ち要約すると、ひとりひとりが決定するもの、それが政治だということだ。

ヤスパースの哲学は限界状況（Grenzsituation）の哲学である。自らを開明する生は、そのような哲学へと自らを駆り立て、逆にまた自己開明はわれわれをそのつど限界状況へと導く。今世紀の政治は、ある決定的意味において、このことに対応している。犯罪国家の限界状況、地球の限界状況、起こり得る核戦争に直面する世界政治の限界状況、そして最後に、この世界政治を目指し、かつて犯罪国家であったナチス・ドイツの政治の現場。連邦共和国の政治は一種の、さまざまな限界状況の中で存立すべき政治である。

彼の哲学における政治の根本的特徴は、あらゆる哲学の根本問題である真理が、知そのものや人間の自己関連性ではなく、交わり（Kommunikation）にのみ由来することである。交わりは政治の原型である。ヤスパースの真理概念は要するに政治的概念なのだ。真理は政治にかかっており、政治に基づき、政治を目指す。

哲学と政治の関連のために、ヤスパースにおけるこの新たな同一性のために、そしてまさに彼が至ろうと努めた世界哲学の意味における新しい哲学と政治のために、限界状況における彼の経験と、交わりの開明に関する熟考がさらに必要である。限界状況および交わりとしての政治、これは哲学的・政治的根本問題なのだ。

ヤスパースと偉大な哲学者たちとは、一つの政治的テーマである。彼は、自分が哲学することをこの由来と関連づけ、そこから世界哲学の将来が可能になると考える。彼はまた、世界政治にも連邦共和国の政治にも、道徳的・精神的背景を持たせる。そこで本質的に必要なのは、偉大な哲学者たちによって常に前もって与えられている可能性のある、歴史的所与である。彼ら

は今日の世界市民の基盤となるのだ。

ヤスパースは哲学と政治の関連にさらに指示を与える。「私は哲学すること、つまり人間が人間らしくなり、人間であることを納得できることを欲した。」私は「言わば普通の人として、街の人と語る」(前掲書一一二六頁)ことを望む。しかしこれらは全てひとえに、これまでさまざまな場面で語ってきた偉大なひとびとを顧みながら、人間の可能性を指示するためなのである。

ヤスパースは一般的思考に向かう。彼が考えているのは、「普遍妥当的な知ではなく、交わりを可能にすること、共同性(コイネー)……理性にとどまる意志。そしてこの理性は、自分以外のもの、実存によって絶えず支えられていなければならない」(前掲書一一二六頁以下)のであり、イマヌエル・カントもそれによってヤスパースを世界市民と任じた、彼の古典的な一文で言い換えるとつまり、「実存は理性を通してのみ明らか(*hell*)になる。理性は実存を通してのみ内容(*Gehalt*)を持つ」[14]ことなのである。

注

(1) Karl Jaspers, *Aneignung und Polemik. Gesammelte Reden und Aufsätze zur Geschichte der Philosophie*, hrsg. v. Hans Saner, München 1968, darin: "Vorwort" zu "Max Weber. Politiker-Forscher-Philosoph", S.425.

(2) Vgl. Max Weber, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, aus Teil I den Abschnitt "Luthers Berufskonzeption", aber vor allem Teil II: "Die Berufsethik des asketischen Protestantismus". [マックス・ウェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波書店。第一章第三節「ルッターの天職観念」および第二章「禁欲的プロテスタンティズムの天職倫理」]

(3) Karl Jaspers, Max Weber. Eine Gedenkrede, S.412, in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1. [カール・ヤスパース「マックス・ウェーバーの追憶」『マックス・ウェーバー』樺俊雄訳、理想社、一一五頁]

(4) Karl Jaspers, Bemerkungen zu Max Webers politischem Denken, in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1.

(5) Karl Jaspers, Max Weber. Eine Gedenkrede, S.410, in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1. [カール・ヤスパース「マックス・ウェーバーの追憶」『マックス・ウェーバー』前掲訳、一一一頁]

(6) Siehe hierzu Karl Jaspers, Wohin treibt die Bundesrepublik? Tatsachen, Gefahren, Chancen, München 1966, u. ders., Antwort zur Kritik meiner Schrift 'Wohin treibt die Bundesrepublik?', München 1967.

(7) Karl Jaspers, Bemerkungen zu Max Webers politischem Denken, S.487, in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1.

(8) Karl Jaspers, Max Weber, Politiker-Forscher-Philosoph, S.428, in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1. [カール・ヤスパース『マックス・ウェーバー』前掲訳、七頁]

(9) Karl Jaspers, *Philosophische Autobiographie*, erweiterte Neuausgabe, München 1977, S.68. [カール・ヤスパース『哲学的自伝』重田英世訳、理想社、一〇五頁]

(10) Karl Jaspers, Vorwort zu Max Weber. Politiker-Forscher-Philosoph, S.425f., in: *Aneignung und Polemik*, vgl. Anm.1.

(11) Karl Jaspers, Wohin treibt die Bundesrepublik?, München 1966, S.129.

(12) Vgl. Karl Jaspers, *Philosophische Autobiographie*, erweiterte Neuausgabe, München 1977, S.84. [カール・ヤスパース、『哲学的自伝』前掲訳、一一八―一一九頁]

(13) Vgl. Karl Jaspers, *Wahrheit, Freiheit und Friede*, München 1958; siehe hierzu Arno Baruzzi, *Philosophie der Lüge*, Darmstadt 1996, S.129ff. (Wahrheit, Freiheit, Lüge—Lüge, Herrschaft, Krieg.) [カール・ヤスパース、『真理・自由・平和』斎藤武雄訳、理想社]

(14) Karl Jaspers, *Vernunft und Existenz*, München 1960, S.60. [カール・ヤスパース、『理性と実存』草薙正夫訳、理想社、八〇頁]

(アルノ・バルッツィ　アウクスブルク大学教授)

訳者付記

本論稿は、アルノ・バルッツィ教授（Prof.Dr.Arno Baruzzi）が、一九九七年四月二六日、大阪大学待兼山会館で行った講演原稿（"Karl Jaspers über Max Weber und sich selbst"）の訳である。

（さかもときょうこ　大学院博士後期課程）